

学校体験と定年後の生きがい (その2)

新井郁男 (上越教育大学)
 濱名陽子 (大阪大学研究生)
 新井真人 (秋田大学)
 小島秀夫 (茨城大学)

I 研究の概要

1. 研究の目的

本研究は、定年後の生きがいと学校時代の体験との関連を明らかにすることによって、学校時代の体験のあり方について考えるための基礎的データを取得することを目的とする。

2. 研究の内容及び方法

この目的を達成するため、定年退職者(本研究では男子に限定)を対象に、学校時代の体験、学校卒業後定年までの体験、現在の生活・意識・活動についての調査(郵送)を行った。昨年は、一つの商社を対象とした調査結果についての報告を行ったが、本発表は、対象企業を拡げ、昨年の調査の経験をもとえて調査項目に若干の修正を行い、本年3月末から5月中旬にかけて実施した調査の中間的報告である。

3. 調査の対象

調査の対象企業、サンプル数、有効回答率は次のようであった。

対 象	No.	退職者数	回答者数	回 率
小野田セメント				
大船渡工場	10	135	102	75.6
田原工場	11	77	53	68.8
藤原工場	12	84	60	71.4
小野田工場	13	87	66	75.9
重安鉱業所	14	12	8	66.7
津久見工場	15	179	140	78.2
北九州工場	16	41	33	80.5
東芝				
那須睡会	20	157	111	70.7

東寿会	21	1279	924	72.2
堀川会	22	670	482	71.9
芝浦会	23	738	522	70.7
晋友会	24	79	59	74.7
三井不動産 100会	30	300	196	65.3
三井信託銀行 三信クラブ	40	336	209	62.2
東レ 滋賀会	50	1179	784	66.5
三井東圧化学	60	862	610	70.8
合 計		6215	4359	70.1

4. 調査対象のプロフィール (%)

	計	10	11	12	13	14	15	16	20	21	22	23	24	30	40	50	60
年 齢																	
60未満	17.8	30.4	22.6	23.4	9.1	25.0	29.3	15.2	15.3	17.3	7.4	5.8	23.8	1.0	26.4	27.9	18.5
60~64	31.0	46.0	30.1	21.7	48.5	37.5	45.0	33.4	21.6	34.3	26.6	24.5	30.6	20.9	23.9	30.6	33.8
65~69	27.8	21.5	45.3	51.7	36.4	37.5	22.3	37.4	30.6	27.9	30.3	31.0	37.4	26.1	23.4	19.9	26.9
70~74	13.6	2.0	1.9	3.3	4.5	0	2.9	3.0	25.2	10.6	22.2	18.8	6.8	20.9	11.1	10.9	15.4
75~	9.8	0	0	0	0	0	0	0	7.2	7.2	13.1	19.3	1.7	29.0	15.4	8.1	5.6
ブランク (退職時)	44.8	71.5	68.0	73.3	57.1	30.0	61.5	64.7	72.9	24.6	58.1	64.1	64.4	36.7	22.5	55.1	12.8
大 学 卒	20.4	0	0	0	0	0	0.7	0	11.7	37.7	8.5	5.4	6.8	20.0	60.3	40.3	27.7
無 職	32.7	48.0	47.2	30.0	43.0	25.0	55.0	39.4	40.5	19.8	43.4	40.6	27.1	37.8	26.3	28.8	30.8
健康状態																	
強い	12.7	17.0	13.0	15.2	0	22.1	3.0	1.8	17.6	19.1	18.9	22.0	17.7	16.7	12.0	14.4	
非常に健康	25.0	23.5	18.9	28.3	18.2	0	29.3	12.1	18.9	27.7	22.8	21.5	32.2	23.0	28.2	22.8	27.3
経済的不安																	
	20.6	7.4	5.0	15.2	25.0	14.3	15.2	6.3	6.1	6.8	7.1	6.8	11.2	2.9	7.8	6.4	

今回の調査は、トヨタ財団の助成及び三井業際研究所の援助・協力を得て「高齢化社会と教育」研究会(代表新井郁男)が行ったものである。発表者以外の研究会メンバーは次のとおり。秋永雄一、岩崎三郎、大沢昇一、河野重男、藤原清夫、鯛中信彦、樋口一辰、牧島見、渡辺博史。(新井郁男)

Ⅱ 学校時代・職場時代の体験

本研究は、学校時代の様々な体験が、退職前の活動のタイプ及び退職後の活動のタイプに影響を与え、ひいては退職後の生きがいを規定する、という基本的枠組に立っている。ここでは、退職後の生きがいに影響を与える重要な変数として、学校時代及び職場時代にどのような体験がなされていたかを分析する。

本調査では、子どものころに体験したと思われる19の項目に関して、M社調査(昨年発表)と同種の質問を行った。その結果は、表Ⅱ-1に示すとおりである。

これらの学校時代の体験をいくつかの領域に分けてとらえるために、19の質問に対する回答を因子分析にかけた。その結果、表Ⅱ-2にあげるように3つの因子が析出された。第1因子は、主として学校生活でのフォーマルな側面における達成経験を示す質問によって特徴づけられ、学校生活での達成経験因子と名づけることができる。第2因子は、主としてスポーツや友人関係など、学校生活のインフォーマルな側面での達成経験を示す質問によって特徴づけられる。そこで第2因子は、友人関係での達成経験因子と名づけることにする。第3因子は、家庭生活などで努力をしたり貴重な経験をしたといった項目によって特徴づけられ、日常生活での達成経験因子と名づけておく。

以上のように、学校時代の経験は、大きく3つの領域に分けられる(なお、3因子は、M社調査で析出された因子とほぼ同じであった)。

次に、スポーツやその他の趣味などが、ラ

イフステージのそれぞれの段階においてどのようになされているかをみてみよう。本調査では、スポーツ、スポーツ以外の趣味、奉仕的な活動の3項目について、学校時代、職場時代、現在のそれぞれの時点で行っていたか(していないか)どうかをきいた。表Ⅱ-3は、3時点でのしている・していないによって、8つのタイプに分けた結果である。

まず、スポーツについては、どの時点でもやっていたというタイプ、学校時代、職場時代はやっていたが現在はやっていないというタイプ、学校時代、職場時代、現在ともやっていた(いる)というタイプがそれぞれ2割程度を占める。次に、スポーツ以外の趣味では、職場時代に始め、現在もやっているとタイプが最も多く、次に、3時点のいずれにおいてもやっていた(いる)というタイプが続く。スポーツに比べ、現在もやっているとタイプが多いこと、また学校時代はやっていたが、職場時代、現在はやっていた(いる)というタイプが多いことが特徴である。最後に、奉仕的活動については、半数以上の人は一度もやったことがなく、現在もやっているとタイプが最も少ない。しかし、学校時代、職場時代はやっていたが、現在はやっているとタイプが最も多くなっている。

こうしたライフステージによる活動タイプが、諸属性とどのような関連があり、また退職後の生きがいとどのように関連しているかについては、発表当日報告する。

(瀧名陽子)

表Ⅰ-1 学校時代の体験

	全体 (4359)	高校 (1779)	大学 (1947)	社会 (1633)
① 学校の授業が楽しいと感じたこと	70.6	75.2	64.9	63.8
② 兄弟のめんどうをみるなど家の手伝いをして非常に役立ったこと	61.3	67.9	65.9	54.1
③ 仕事をしながらの経済を助けたり自分の学費をかきだしたこと	50.3	26.8	35.4	10.9
④ 学校で先生からほめられたり、いろいろなことを教わられたりして、価値を感じたこと	52.7	41.4	57.7	30.3
⑤ 初体験などを感じたこと	59.2	34.8	52.5	53.5
⑥ 友人などに勉強以外のことで自慢できる特技なり長所を持っていると感じたこと	42.5	44.4	40.8	36.9
⑦ 校長になったこと	45.2	52.8	35.7	44.5
⑧ 勉強の結果について深い満足感を味わったこと	55.4	61.7	47.8	52.5
⑨ 友だちや先輩のめんどうをみたり相談のつらかったこと	50.2	54.1	45.8	38.3
⑩ 時間のたつのを忘れて野外で遊んだこと	77.8	76.2	79.3	50.2
⑪ 自分に課せられた役割や責任を果たしたという満足感を味わったこと	72.8	74.2	71.2	52.9
⑫ 苦手なものを克服して努力の大切さを身にしみて感じたこと	73.8	57.0	50.0	39.1
⑬ 級友や先輩と一緒に、何かをなしとげたという満足を感じたこと	42.6	52.4	44.7	32.8
⑭ スポーツで良い記録を出したり、入賞して喜びを感じたこと	44.2	44.6	44.0	44.1
⑮ 絵・習字・作文など得意な分野で、賞をもらったりして喜びを感じたこと	59.3	62.8	54.2	48.7
⑯ 顧問を解いたりして先輩からほめられたこと	42.5	44.2	38.2	36.6
⑰ クラブなどのリーダーになったこと	39.0	44.7	32.0	37.3
⑱ もうだめだと思うような苦しい体験をしたこと	28.3	29.6	28.2	14.8
⑲ 身近な人や動物の死などに接して、非常に悲しい思いをしたこと	57.9	61.6	59.0	36.9

* 数字は、「よくあった」と「さほどあった」を合計したパーセント
 * 例: ネットワーク、退職時の部門が「総務・経理部門」「技術部門」「研究部門」「販売・サービス部門」であった人、アルバイトとは、「管理部門」(品質管理、検査、保守も含む)、「製造部門」「運輸・運搬部門」であった人などを示す。

表Ⅰ-2 3時点での活動タイプ

スポーツ			趣味(スポーツ以外)		
学校時代	職場時代	現在 (%)	学校時代	職場時代	現在 (%)
○	○	○ -18.7	○	○	○ -20.6
○	○	× -19.5	○	○	× -5.5
○	×	○ -8.9	○	×	○ -2.4
○	×	× -14.0	○	×	× -3.3
×	○	○ -6.4	×	○	○ -27.9
×	○	× -10.7	×	○	× -9.6
×	×	○ -4.9	×	×	○ -12.2
×	×	× -21.8	×	×	× -18.6

社会的活動		
学校時代	職場時代	現在 (%)
○	○	○ -4.2
○	○	× -4.3
○	×	○ -1.4
○	×	× -5.7
×	○	○ -8.5
×	○	× -6.8
×	×	○ -13.6
×	×	× -44.6

* ○ -12111 (12-3)
 × -1211111 (12-11111)

表Ⅱ-2 学校時代の体験の因子分析結果

第1因子 (学校生活での達成経験因子)	
1	学校で先生のめんどろから(たり、いろいろなことを教わられたりして、価値を感じたこと (2775)
2	勉強の結果について深い満足感を味わったこと (760)
3	顧問を解いたり先生からほめられたこと (696)
4	学校の授業が楽しいと感じたこと (694)
5	級長になったこと (672)
6	級友からの信頼が厚いと感じたこと (639)
7	絵・習字・作文など得意な分野で、賞をもらったりして喜びを感じたこと (513)
8	クラブなどのリーダーになったこと (494)
9	友だちや先輩のめんどうをみたり相談のつらかったこと (433)
第2因子 (友人関係での達成経験因子)	
1	スポーツで良い記録を出したり、入賞して喜びを感じたこと (565)
2	クラブなどのリーダーになったこと (513)
3	友人などに勉強以外のことで自慢できる特技なり長所を持っていると感じたこと (513)
4	級友や先輩と一緒に、何かをなしとげたという満足を感じたこと (502)
第3因子 (日常生活での達成経験因子)	
1	仕事をしながらの経済を助けたり自分の学費をかきだしたこと (508)
2	兄弟のめんどうをみるなど家の手伝いをして非常に役立ったこと (502)
3	苦手なものを克服して努力の大切さを身にしみて感じたこと (430)

* ()内の数字は、バリマックス回転後の因子負荷量

Ⅲ 余暇活動と生きがい

ここでは、1 余暇活動の実態、2 余暇活動のタイプ、および3 余暇活動と生きがいについて示される。

1 余暇活動の実態
 予め用意した30項目の余暇活動について、その行為率を就業状態別に整理した。定年退職にともなう就業状態の著しい変化は、その自由時間、収入、人間関係網などに影響するので、余暇活動も独自の姿を示すであろう。

表Ⅲ-1 に示れば、つぎの2点がわかる。
 ① 就業状態の違いを越えて共通してみられる余暇活動

2. 行為率が約5割以上のもの——テレビ視聴、読書、土いじり、軽い体操や散歩、学校の同窓会や職場のOB会への出席、国内旅行など (③ ⑥ ⑩ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲)。

b. 行為率が約4~2割のもの——囲碁や麻雀、民謡やカラオケ、スポーツ観戦、ハイキングなど (④ ⑫ ⑰ ⑲)。

C. 行存率が約1割以下と低いもの
 学習活動、絵・俳句・書道などの趣味的活動、
 「する」スポーツなど(⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮)。

②就業状態の違いによって異なる余暇活動
 ゴルフ、つり、ゲート・ボールなどのスポ
 ーツ、日曜大工、パチンコなどの勝負ごと、
 写真、切手などの収集、芝居見物や音楽・美
 術の鑑賞、海外旅行、町内会や地域での活動、
 宗教活動など(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒)。
 いうまでもなく、定年退職者の余暇活動は、
 その人の教養や価値観などによっても影響を
 うける。それは学歴差などに象徴されている。

2余暇活動のタイプ
 多様な余暇活動も、その性質からいくつか
 のタイプに分類できる。自己享乐的なもの
 あれば、自己形成的なものもある。個人的・
 家庭的なものあれば、友人、職場・地域社
 会などとかかわりの深いものもある。スポ
 ーツなどのように身体を動かす戸外の活動もあ
 れば、頭や手を働かせる室内で出来る趣味的
 活動もある。仕事のつまみ食いばかりのもの
 があれば、仕事とは無関係なものもある。
 こうした分類は、われわれの日常経験をふ
 りかえったときに出てくるものであるが、多
 様な余暇活動にみられる基本的性質を因子分
 析によって抽出する試みもある。

われわれは先の30項目の余暇活動について
 因子分析を試みた。表Ⅲ-2は、その結果ど
 あり、因子負荷量0.32以上のものを示した。

表Ⅲ-1 就業形態別余暇活動の行存率%

就業形態	全 体	① 社長 専任	② 社長 補佐	③ 一般 社員	④ 臨時 雇	⑤ パート タイム	⑥ 非 農 林 業 自 学 者	⑦ 自 学 者	⑧ 農 林 業 自 学 者	⑨ 自 言 言 主	⑩ 自 言 言 主	⑪ 自 言 言 主	⑫ 自 言 言 主	⑬ 自 言 言 主	⑭ 自 言 言 主	⑮ 自 言 言 主	⑯ 自 言 言 主	⑰ 自 言 言 主	⑱ 自 言 言 主	⑲ 自 言 言 主	⑳ 自 言 言 主	㉑ 自 言 言 主	㉒ 自 言 言 主
1	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7	88.7
2	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8	70.8
3	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5	68.5
4	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9	65.9
5	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1	64.1
6	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9	61.9
7	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8
8	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9	48.9
9	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7	43.7
10	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1	34.1
11	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6
12	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6	33.6
13	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8
14	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3	29.3
15	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0
16	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6	23.6
17	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2
18	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1
19	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7
20	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2
21	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7	10.7
22	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3
23	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8
24	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6
25	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6
26	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4	9.4
27	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0
28	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0
29	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3

表Ⅲ-2 余暇活動の因子分析結果

因子	因子I	因子II	因子III	因子IV
23	0.46	0.62	0.41	0.47
24	0.44	0.58	0.38	0.45
25	0.42	0.36	0.35	
21	0.40		0.33	
11	0.37		0.32	
8	0.32			

各因子の特徴は何だろうか。
 表Ⅲ-3のように整理すると、各因子は、
 人々の就業状態や学歴と深い関連があるよう
 だ。その対応関係は、つぎのようである。
 ①第I因子——高学歴のトップ・オーガニ
 ゼーション・マンや非農林業自学者に典型的
 にみられるもの。
 ②第II因子——地域社会に根をほっている
 学歴の余り高くない農林業自学者に代表的に
 みられるもの。
 ③第III因子——学歴の割合が高い非農林業
 自学者に、相対的に多くみられるもの。
 ④第IV因子——学歴が余り高くない農林業
 自学者、一般社員・パートの人によくみられ

＊く研究した余暇活動

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| ① ゴルフ | ⑩ 映画・芝居・音楽会・興行場に行く |
| ② つり | ⑪ スポーツをみに行く |
| ③ ジョギング・健康体操・散歩など | ⑫ テレビをみる |
| ④ ゲートボール | ⑬ カルチャーセンターに行ったり、学
習活動、研究活動をする |
| ⑤ 剣道・柔道・空手・サッカー・野球
テニスなどその他のスポーツ | ⑭ 資格をとるための学習活動 |
| ⑥ 家庭菜園・盆栽・花・植木・ビリ | ⑮ 読書 |
| ⑦ 日曜大工のこと | ⑯ ハイキング |
| ⑧ 囲碁・将棋・トランプ・麻雀など | ⑰ 泊りがけの国内旅行 |
| ⑨ パチンコ・競輪・競馬など | ⑱ 海外旅行 |
| ⑩ 絵・彫刻・陶芸など | ⑲ 町内会・自治会活動 |
| ⑪ 俳句・短歌・詩 | ⑳ 地域での専任的活動 |
| ⑫ 長篇・詩吟・小説・話曲・コーラス
カラオケ・楽器演奏 | ㉑ 宗教活動 |
| ⑬ 茶道・華道・書道 | ㉒ 学校の同窓会や校友会などへの出席 |
| ⑭ 写真・カメラ | ㉓ 職場のOB会への出席 |
| ⑮ 切手・古銭・骨董品などの収集 | ㉔ その他の活動(具体的に) |

るもの。

表Ⅲ-3 因子分析結果と行爲者の属性との関連

因子	現在の就業状態						学歴			生きがいを感じている	
	A 社長の重役	B 一般社員	C 臨時社員	D 非農林業 自営業者	E 農林業 自営業者	F 高学歴 旧制中学校	G 旧制高等学校	H 旧制大学	I 旧制大学	J 旧制大学	K 旧制大学
I ①	71.3	9.0	5.1	26.3	0.9	3.5	21.4	48.7	78.6	67.1	
I ②	10.2	26.9	20.2	16.6	20.5	24.4	18.6	8.1	70.7	69.9	
I ③	5.74	54.0	48.4	61.5	46.4	37.3	66.0	64.7	72.2	66.6	
II ④	6.4	3.0	12.1	8.5	36.6	12.8	8.6	2.2	73.1	69.9	
II ⑤	12.4	16.0	8.0	10.8	7.1	2.1	11.1	10.3	79.5	69.0	
IV ⑥	54.3	71.5	75.3	69.0	66.5	79.1	71.7	56.9	71.0	67.6	
IV ⑦	33.4	67.0	65.4	46.5	61.6	51.3	52.0	35.3	71.2	68.9	
I ⑧	43.6	35.3	26.7	38.0	19.8	26.2	38.2	37.0	72.6	68.6	
I ⑨	7.9	15.9	16.9	12.3	8.0	14.1	12.6	4.2	65.0	70.7	
III ⑩	11.4	7.3	4.7	13.2	5.4	3.8	10.8	13.1	77.7	69.1	
III ⑪	8.7	5.0	7.1	12.8	8.0	6.7	9.4	12.0	81.3	68.8	
III ⑫	26.7	31.8	26.1	26.5	22.7	25.1	26.1	18.8	74.4	67.3	
III ⑬	6.4	3.6	5.9	13.8	9.8	8.8	12.1	8.1	81.5	68.9	
III ⑭	55.0	35.0	30.8	52.8	29.7	33.0	47.4	54.6	73.9	65.3	
III ⑮	19.0	16.4	14.9	23.2	10.6	14.1	17.4	20.8	76.0	65.8	
III ⑯	49.0	22.0	21.4	27.9	14.3	20.3	32.0	54.6	72.2	65.7	
III ⑰	33.7	33.9	34.8	29.3	31.3	39.7	36.1	27.8	72.5	68.8	
III ⑱	93.7	88.7	86.2	90.5	85.7	88.4	91.5	92.4	70.4	67.5	
III ⑲	9.4	6.4	3.9	17.1	8.9	5.5	9.6	17.4	84.5	68.3	
III ⑳	6.4	6.0	8.3	11.0	6.4	5.5	8.6	6.7	76.5	69.7	
I ㉑	86.7	57.2	46.0	68.8	47.7	48.9	67.5	87.0	73.9	62.3	
I ㉒	30.1	31.1	28.5	31.0	22.5	31.4	32.6	34.7	76.8	66.7	
I ㉓	66.0	56.3	62.5	71.8	62.8	61.6	62.9	63.6	74.4	62.6	
II ㉔	28.5	6.6	10.1	23.4	13.6	7.7	12.7	22.1	79.8	68.2	
II ㉕	10.3	38.1	38.9	32.1	61.3	45.8	35.4	7.1	72.8	68.9	
II ㉖	8.4	26.5	30.0	29.0	61.7	35.4	25.2	2.9	77.8	68.0	
II ㉗	6.8	10.7	11.5	11.5	23.2	14.0	9.2	8.0	77.8	69.3	
I ㉘	85.5	57.3	57.8	74.5	75.0	54.3	57.5	84.4	75.0	60.9	
I ㉙	83.7	57.7	69.4	76.5	64.0	66.8	74.9	80.4	74.0	59.9	
I ㉚	15.2	6.0	10.3	22.4	9.9	10.5	14.2	20.7	85.8	65.5	

注：印 学歴が高いほど行爲率が低い
X印 学歴が高いほど行爲率が低い

これは、定年退職者の余暇活動が、活動に固有な性質よりむしろ人々の置かれている社会的状況やそれまでに習得した文化に影響され易いことを示しているといえまいか。

3 余暇活動と生きがい

定年退職後も働く人々は多いが、やがて第2、第3の職場を退職すると、いままでになく余暇の過ごし方が生きがいを左右するようになる。今回の調査結果でも、生きがいや充実感を感じている人の方が、そうでない人比べて余暇活動の行爲率が高い(表Ⅲ-3参照)。しかし、活動の質にも注意する必要がある。行爲率率の高い余暇活動は、必ずしもその活動に生きがいを感じる人が多いことを

意味しないからである。たとえば、テレビをみる人は約9割いるが、それにとり生きがいを感ずる人は1.3%にすぎない。

表Ⅲ-4は、現在もっとも生きがいを感じている余暇活動を1つ選択してもらった結果である。それによれば、つぎの2点が指摘できる。

① 因子分析によって抽出された4因子の特徴が、第Ⅲ因子を除きかなり再見されている。非農林業自営業者で第Ⅳ因子とかがめりの深い活動を挙げているものは、約1割である。

② 個人差も非常に大きいように思われる。

表Ⅲ-4 最も生きがいを感じている余暇活動

余暇活動	全	現在の就業状態						学歴		
		A 社長の重役	B 一般社員	C 臨時社員	D 非農林業 自営業者	E 農林業 自営業者	F 仕事	G 高学歴 旧制中学校	H 旧制高等学校	I 旧制大学
人数	3496	511	246	170	175	261	1105	873	879	792
①	9.0	23.5	3.7	1.2	9.1	1.2	2.9	1.7	8.3	14.4
②	2.8	2.0	5.7	4.7	1.1	2.0	2.9	4.0	3.9	0.6
③	3.9	2.2	3.7	2.9	3.4	3.5	5.6	4.4	4.3	3.2
④	2.2	0.2	0.0	2.4	1.1	10.3	4.5	4.9	1.8	0.1
⑤	17.8	8.4	26.0	31.2	2.0	25.6	20.7	27.6	18.5	9.6
⑥	3.3	1.4	5.7	6.5	3.4	1.2	7.1	2.0	3.1	1.5
⑦	5.2	5.3	3.7	5.9	5.7	0.0	5.5	3.6	6.1	5.4
⑧	4.1	3.3	2.7	2.4	3.4	3.5	3.6	4.5	4.4	3.8
⑨	8.1	2.5	5.3	4.7	5.7	2.3	6.7	3.1	5.1	16.5
⑩	5.8	6.1	6.5	5.3	5.1	4.7	5.8	6.6	5.5	2.8
⑪	2.9	1.0	3.7	5.7	2.3	2.1	3.0	5.0	3.6	0.8
⑫	1.9	0.8	1.2	1.8	3.4	2.3	2.4	2.3	3.0	1.3
平均	33.0	32.1	27.1	24.5	44.3	23.1	33.7	26.3	32.0	40.3
	(110.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)

表Ⅲ-4 からだけでは、定年退職後の余暇活動と生きがいの問題は部分的にしか分からない。大企業ホワイト・カラーの定年退職者調査では「再就職→退職」型の場合、自由時間満足度と余暇活動満足度のギャップが最大であった。今回の調査結果も、とりわけ「仕事をしていない」人々について、さらに詳細な分析が必要である。

(新井真人)

IV 学校体験と生きがい

1. 子どもの頃のパーソナリティ

ここでは、子どもの頃のパーソナリティと現在の生きがい感の関連について述べる。生きがい感は現在の住居満足や家族関係といったものによって規定されているばかりではなく、子どもの頃のパーソナリティとも関連しているのではないか、というのが基本的仮説である。

本調査では、子どもの頃のパーソナリティを調べるものとして、以下のような質問項目が用意された。()は「はい」と回答した人の比率。

①「遊びでも勉強や仕事でも、やりだすと、ととん燃中して、まあまあものになるほうだった」(63.2%)

②「少し無理だと思われるぐらいの目標を立てて、頑張るほうだった」(50.9%)

③「リーダーになって苦労するよりは、のんきに人に従っているほうが気楽でよかった」(30.2%)

④「なにごとによらず、あまりがツがツやるのほまらりで、気ままにのんびりやる主義だった」(39.7%)

⑤「他人のめんどうをみるのが好きで、他人から頼られるほうだった」(53.4%)

⑥「小さい頃は、お山の大将になるのが好きでほうだった」(31.2%)

これらの質問項目は、鋭戸の分析を参考にしたものであるが、①②④が積極-消極スケールを構成する質問項目、それ以外が主流-反主流スケールを構成する質問項目である。現在、これらの項目がスケールを構成しているかどうかを再検討中であるが、これらのスケールと生きがいの関連をみる。また、これらのスケール間の流れ、すなわち、純粹主流から純粹反主流までの流れがどのようになっ

ているのかも検討中である。

子ども時代の体験やパーソナリティと現在の生きがい感に関連があるという事に対して、これら二つの変数間には時間も長く、他の変数も多く存在しているため、これらの測定は困難なのではないかと疑問が存すると思われるため、ここでこれらの基本的仮説を示しておこう。

①子どもの頃の体験やパーソナリティは、その後の職業生活などに影響を与えている。

②職業生活によって本人のパーソナリティも変化する。

③しかしながら、退職した後には、職業生活によって得られるパーソナリティではなく、子どもの頃のパーソナリティが重要になってくる。

こうした仮説を検証するのは困難な事と思われるが、多重クロス表の分析を中心として探査的に分析を進めてゆく。

2. 現在の価値観と生きがい

個人の価値観と生きがいに強い関連があることは広く知られている。すなわち、個人の価値観によって生きがいの対象は変わり、生きがい感も変わる。

本研究では、調査対象者の価値観を明らかにするために、次の14の質問項目に対し、それぞれ「全くそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で回答してもらった。(表IV-1)

表IV-1 現在の価値観

① 先強の者は来永く守っていきたい.....	(94.0%)
② 子供が一人もいなかったら、家が絶えないように養子をとりたい.....	(46.7%)
③ 多くの人から喜ばれるようなことを進んでやりたい.....	(82.6%)
④ 人の上に立つものには思いやりが必要だ.....	(96.8%)
⑤ 結婚相手は家柄も考えて決めべきだ.....	(39.0%)
⑥ 出世や昇進がかかっていれば、多少のことはたえしんのできた.....	(43.4%)
⑦ 町内の行事や活動にはあまり関係したくない.....	(18.9%)
⑧ 隣近所とのつきあいは特にしたくない.....	(8.6%)
⑨ 世の中で自分のやれることは限りがあるので人に頼る以外にない.....	(31.6%)
⑩ 職場においてもお互いの立場を尊重していくことが重要である.....	(96.3%)
⑪ 多くの人から孤立してでも自分の正しいと思う考えを主張したい.....	(39.8%)
⑫ 仕事のことで自分が正しいと思えばそれが受け入れられるまで主張してきた.....	(44.1%)
⑬ いろいろなタイプの人とつき合っていきたい.....	(68.8%)
⑭ できるだけ多くの種族仲間と知り合いたい.....	(68.2%)

(注)「全くそう思う」と「そう思う」の合計。

この結果をさらに因子分析にかけ、どういった価値観があるのかを明らかにした。その結果、次のような結果が明らかにされた。この質問項目は、M社の退職者に対してもなされているが、因子分析の結果にやや差が認められた。

第1因子：「町内の行事」や「近所づきあい」はさけるといった因子。M社の場合も同様の因子が確認された。

第2因子：「人の上に立つものは思いやりが必要だ」や「職場においてもお互いの立場を尊重する」といった他人尊重の因子。この結果は、M社退職者の結果とは異なる。

第3因子：「いろいろなタイプの人とつきあいたい」や「できるだけ多くの趣味仲間と知り合いたい」といった社交性に関する因子。

第4因子：「多くの人から孤立してでも」や「自分が正しいと思えば」に代表されるような自己主張の因子。

第5因子：「結婚相手は家柄も」や「出世や昇進が」という質問項目に代表されるような権威に関する因子。

これらの因子と生きがいや他の社会意識との関連については現在分析途中である。この発表要旨を普く時点では分析を始めたばかりであるため、多様な分析はなされていない。より高度な分析結果は学会当日に示す予定である。

(小島秀夫)

付 調査内容

1. 属性

- 年齢 (Q1)
- 居住地 (Q2)
- 居住年数 (Q3)
- 居住形態 (Q4)
- 家族形態 (Q5)

- 本人の健康 (Q8A)
- 妻の健康 (Q8B)
- 定年後の年数 (Q28)
- 転職回数 (Q30)
- 採用の形態 (Q31)
- 退職時の勤務先 (本社, 支社など) (Q32)
- 退職時の所属部門 (Q33)
- 退職時の役職 (Q34)
- 現在の就業状態 (Q36)
- 現在の仕事内容 (Q37)
- 現在の経済状態 (Q39, 41, 42)
- 階級帰属意識 (Q25)
- 学歴 (Q44)

2 過去について

- 子供時代の性格 (Q9)
- 子供時代の体験 (学校・家庭・友人関係) (Q10)
- 子供時代の体験についての評価・反省 (Q11, 12)
- 重要な他者 (Q13)
- 学校時代・職場時代・現在のスポーツ活動, その他の趣味, 奉仕活動の有無 (Q14, 15, 16)
- 生きがいへの戦争の影響 (Q45)
- 定年前に考えたい会社への希望 (Q29)

3 現在について

- 生きがい・充実感 (Q22)
- 生活での不安の内容 (Q21)
- 生きがいの対象 (Q20, Q18-2)
- 生活満足度 (Q23)
- 活動の内容別有無 (Q18-1)
- テレビ視聴 (Q17)
- 役割貢献度感 (Q19)
- 統制感 (locus of control) (Q24)
- 価値観 (Q27)
- 仕事の有無の理由 (Q38, 40)
- 退職した会社への要望 (Q35)
- ライフアップマンションについての意識 (Q6, 7)
- 年寄りの呼称 (Q26)
- 家計について (Q43)
- 後輩への助言 (Q46)